

## 〈やさしさの闘い〉

社会と自己をめぐる思索の旅路で

● 栗原 彬著

いま最も感性がこまやかで、鋭いと思われる政治学者の自分と他者をつなぐものへの優しい闘いの短文・批評。政治学などという、いかがわしいものに携わる者には、いくつかの義務がある。ひとつは現象ではなく、おこっている事実や現実への怒りやナジミを通じて、その根におりていくこと。その根のはり方や伸ばしようを絶えずおし測



ること。そして、その運動の多様性と変化のなかに、いくつものおだやかな寛容を見いだすことなどである。思いやりと自省をその根の論理のみちすじにまで降りて明らかにするこの本のしむぎだすものは、奥も幅もふいやわらぎがある。批評や理は、自己をまず批評・批判さる地平に身をさらす決意が、

やかにしみる。(B6判・二

頁・二四〇〇円・新曜社)